

# 六朝史籍に見ゆる金翅と云ふ語に就きて

宮川尙志

六朝末期の陳代の記事に屢々「金翅」といふ名稱が見出だされる。例へば、

1、大建五年除貞威將軍吳興太守。其年隨都督吳明徹、北討出秦郡。別遣敬成爲都督、乘金翅、自歐

陽引埭上泝江由廣陵。齊人皆城守弗敢出。(陳書

卷十二 徐敬成傳)

2、(陳)文帝嗣位中略累海遷臨太守。後乘金翅助父

(程靈洗也) 鎮郢城。(南史卷六十七程文季傳)

3、隋兵濟江中略(陳)後主、召蕭摩訶以下於內殿定

議。忠曰、中略給臣精兵一萬金翅三百艘、下江徑

掩六合。(南史卷六十七任忠傳)

4、後主即位進號征西將軍中略及隋兵濟江毅謂僕射

袁憲曰、京口采石俱是要所。各須銳卒數千金翅。二

百、都下江中、上下防捍。如其不然大事去矣。諸將咸從其議。(陳書卷三十一樊毅傳)

5、廢帝即位、進號安南將軍、改封重安縣侯食邑一

千五百戶。文帝以湘州出杉木舟、使皎營造大艦金

翅等二百餘艘并諸水戰之具、欲以入漢及峽。韓子

高誅後、皎內不自安。繕甲聚徒厚禮所部守宰。高

宗頻命皎送大艦金翅等。推遷不至。光大元年密啓

求廣州。以觀時主意。高宗僞許之。而詔書未出。

皎亦遣使句引周兵、又崇奉蕭繹爲主、士馬甚盛。

詔乃以吳明徹爲湘州刺史、實欲以輕兵襲之。是時

慮皎先發。乃前遣明徹率衆三萬乘金翅、直趨郢

州。又遣撫軍大將軍淳于量、率衆五萬乘大艦以繼

之。(陳書卷二十華皎傳)

以上五例の中、1と2とは、陳高宗宣皇帝の太建五年吳明徹をして北齊を討たしめた時のことで、3と4とは、陳の滅亡直前、後主禎明二年、隋軍の南下に對する防戰の策を講じてゐた時の事である。5は廢帝臨海王の光大元年、文帝以來の宿臣華皎が後梁の援けを假りて謀反した時の記事である。

扱これらの記事を綜合して考へると「金翅」とは、長江其他の水戰に用ひた軍船の一種であらうと想像せられる。資治通鑑陳紀(卷百七十六)の4に當る所の記事の胡三省の註には唯「金翅船名」としてゐるのみであるが今あげた3、4の記事から推せば、一艘に二、三十人を乗組ませられる可成りの大船で、5の記事によると

恐らく、文帝が湘州の杉木を以て營造したのが始めてあるらしく(此事又重較說郭五十九、三國典略にも見ゆ)新造精銳なる軍船としてその後の水戰に於て重視せられて居た様である。

然らば軍船の名に何故金翅といふ名を與へたかと考

へると直ちに聯想されるのは佛典に見える金翅鳥(迦樓羅梵名 Garuda)である。この鳥は恐らく鷲の如き猛禽を神話化したもので鳥類の王とせられ、諸大龍王以外の諸龍を貪食すると傳へられてゐる。又密教ではこの鳥を本尊として、病患・風雨・惡雷を除く爲の修法として迦樓羅法なるものあり、我國の鎌倉時代の眞言宗の著作覺禪抄大日本佛敎全書所收には、この法を以て軍陣を散ぜしめ、怨家を伏する修法を述べてゐる。この推測にして正しければ陳書や南史に見える「金翅」とはこの迦樓羅鳥の形を船首にでも備へ附けた軍船ではあるまいか。

この場合參考すべきは、古くから支那の文獻にある龍頭鶴首といふ語である。龍頭・鶴首とは云ふ迄もなく、龍並びに鶴の形を船首に畫いた船のことで、夫々龍舟及び艫といふ名が出来てゐる。三國志魏志の文帝紀に、

黃初五年爲水軍。親御龍舟、循蔡潁入浮淮。

とあり、多少儀衛的な意味を伴ひ軍事に用ひた事が分る。龍舟の事はさて置き、鷓首について述べれば鷓或ひは鷓に作り、形鷓に似て大、羽色蒼白なる鳥にして善く翔り風雨を畏れずとせられてきたものである。蓋しこの鳥の形を船首に畫くことにより、船が航進する際に危険を齎らすべき風雨の害を避け得べしとする呪術的目的を持つものであらう。龍も亦、古來水神と考へられてゐたから威儀的な裝飾以上の呪術的意味を以て舟首に備へたものであらう。淮南子本經訓に「龍舟鷓首浮吹以娛」とあり鷓のみについては、梁の簡文帝が「樓船寫退鷓」と詠じ、其他謝靈運・王融・陳後主等が詩賦にこれを題材にしてゐるのを見ると、單に娛樂的なもので、わが王朝風流の公卿が詩歌管絃の遊樂に用ひし如き、裝飾とも考へられるが起原に於て、又軍事上に於ては、威嚇的な意味があつたことは容易に肯定できよう。晋書(卷二)王濬傳に

武帝謀伐吳。詔濬修舟艦。濬乃作大艦、連舫百二十

步中略、又書鷓首怪獸於船首以懼江神。舟棹之盛、自古未有。

とあり、太平御覽(卷四百六十五)引臧榮緒晋書に西晋の羊祜が吳を討たんとした時吳中童謡あり、「阿童復阿童、銜刀浮渡江、不畏岸上獸、但畏水中龍」と言つたので羊祜は水軍の功あるべきを思ひ、且つ阿童なる小字を有せし、王濬を用ひ水師を將ゐしめたとある。蓋し長江の江神を厭する爲、且つは水戰に長じた江東の軍隊を懼伏せんため鷓といふ呪力を有する鳥を船に畫いたのであらう。文選(卷二)西京賦の薛綜註に「鷓首者船頭象鷓鳥厭水神。」とあるのはこの推定の誤たざる事を證してゐる。

扱この頃から佛教は支那人の思想に重大なる變化を與へつゝあつたのである。それは單に宗教寧ろ哲學として或ひは文學としてさへも貴族階級の精神生活に攝受されて行つたに止らず、佛教と共に流入してきた天竺・西域の珍奇な事物に關する新知識も亦漢人の眼を

駭かし、彼等の經驗を廣めるに力ありしこと疑ひない。金翅なる語が六朝以前に見えず、六朝文明闕はなる頃の史籍に初めて見える事は、これが佛典に謂ふ所の金翅鳥と同一物を指すといふ推測を妨げざるものである。

金翅鳥に關する記載は阿含部に屬する若干の佛典に見えるが、西晋沙門法立共法炬譯の大樓炭經龍鳥品は蓋し支那に最初のこれに關する知識を傳へたものであらう。又長安で僧肇が譯した前者と同系の世起經にも同様に見え涅槃經(北凉曇無讖及宋慧嚴譯)にも「食一切水族金銀等寶」と金鷄鳥に就いて述べ(義楚六帖二十三引による)この種の經典が、六朝の初めから廣く支那に行はれその中の知識が知れ亘つてゐたであらうといふ推測を許さしめる。

一方在來の支那史籍に於ても、南史(卷四十四)南郡王子夏の傳に、

初武帝(南齊)夢金翅鳥下殿庭、搏食小龍無數、乃飛

上天。

とあり、明らかに佛典から得た知識なる事を示してゐる。又、南齊書五行志に、

建武四年明帝出舊宮、送豫章王第二女綏安主降嬪、還上輦。輦上金翅。無故自折落地。

とある。蓋しこの記事の金翅とは金翅鳥の形を輦上に飾り付けたものであらう。既に輦等の飾りに用ひられてゐたならば、それが船首の飾りになつても不自然であるまいと思はれる。

陳後主禎明元年十一月、隋の平陳の策漸く熟し、上柱國楊素は永安に於て水軍の整備に着手した。隋書(卷四十八)楊素傳

素居永安造大艦名曰五牙。上起樓五層高百餘尺。左右前後置六拍竿並高五十尺。容戰士八百人。旗幟加於上。次曰黃龍。置兵百人。自餘平乘舩等各有差。

彼が黃龍數千艘を率ゐる東下するや、軍容の壯なる

に在り、四大洲も爲に臭氣あり等いふ如き記載は彼處の淵此處の沼に潛むてふ龍を以て瑞獸とし、その逆鱗



雲崗北魏石刻金翅鳥

を觀、陳人懼れて「清河公(素)即江神也」と嘆じたと見える。この時に於て、陳から「金翅」と名付ける船

を以て應戰したことはその呪術的意圖を察するに難くあるまい。

前述の佛典に據れば金翅鳥は縦廣六千由旬の宮に棲み、七重の宮牆・欄楯・羅網行樹あり、周匝校飾、七寶を以て成り、究羅睺・摩羅樹を飛下し、海水を

披くこと二百由旬、龍を取り隨意に食ふ。龍の殘骸狼籍として地上

を畏れてゐた支那人の舊來の考へを超絶したものである。江淮の大鳥鶴も物の數ではない。

折しも既に爛熟の期に達してゐた南朝宮廷文明はその宗教的側面に於ても祈禱・厭勝的佛敎を發達させてゐた。陳後主は敵軍迫るのを聞いて戰備を籌らず佛寺に捨身して禍を避けんとしたと云ふ(陳書)。「金翅」と云ふ様な船を用ひたのもかうした末期的宗教文化の現はれであらう。後庭に玉樹の曲を唱ひ、大江に金翅の船を浮べ以て家國の萬歳を祈求した亡國の君主の心事も亦憐れむべきである。

〔附記〕この稿實は昨年七月一度成りしも、其後已むなき事情にて今に至り一部訂正して諸賢の叱正を仰ぐ事にした。補正すべき處猶多きを感ずる。圖版を描かれし水野氏其他助言を賜はりし諸先輩の御厚意を謝す。